



市立島田市民病院

「万全のサポート体制の下、 現場主義で優れた臨床能力を養う」

1946年（昭和21年）に前身となる島田町立診療所が開設。1950年（昭和25年）に島田市立病院へ改称し、1979年（昭和54年）に現在の市民病院としてスタートを切る。開院以来、島田地域の医療を支える基幹病院としての役割を果たしてきた。独立した救急センターを備え迅速な救急医療を提供するとともに、内科系・外科系各科、病理科など専門科が揃い総合的・専門的な体制を整え地域住民の医療ニーズに応えている。

■島田地域の医療を支える中核病院



服部 隆一 院長

自治体病院として近隣の地域医療に貢献してきた当院。その医療の特徴を服部隆一院長に伺った。

「救急医療がまず1つこの病院の大きな特徴になります。島田地域唯一の急性期病院ですので、この地域の救急車出動のうち95%が当院へ搬送され、急性期疾患患者をすべて受け入れる姿勢で臨んでいます」。

そして、この救急医療は教育の場としても相応しいという。

「初期研修医でも、2年間を通じて救急にかかわるプログラムを組んでいます。これは救急センターでは非常に幅広い疾患を

経験できるからです。実際に、2009年度は3,909台の救急車が来ましたが、その疾患の内訳を当院のウェブサイト公表していますので、非常に幅広い疾患を経験できることが一目でわかりいただけると思います」。

さらに当院の特徴として、「地域連携への取り組み」を挙げる。

「今、非常に熱心に進めているのが地域連携です。地域連携室で開業医からの紹介を受ける際に、全体の7～8割はファックスで受け、すぐに予約を入れて待ち時間を短くするなど工夫をしています。また、関連して、院内だけではなく、地域の4つの公立病院が共同して、退院後も開業医と連携していくために地域連携パスの作成を進めているところです」。

また、地域住民とのコミュニケーションも積極的に図られ、「院長と話爽快^{はなそうかい}」と題した講演会が開かれているという。

●DATA

所在地 : 〒427-8502 静岡県島田市野田1200番地5

開 院 : 1946年（昭和21年）

病床数 : 536床（一般467床、精神20床、感染症6床、結核8床、療養35床）

医師数 : 93名（平成22年4月1日現在）

研修医数 : 初期研修医15名、後期研修医8名（うち派遣研修医2名）

URL : <http://www.municipal-hospital.shimada.shizuoka.jp/>



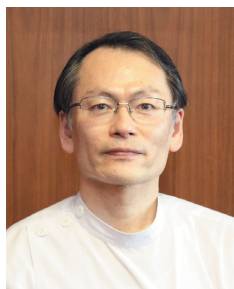
「2009年から、院長の私が出向いて住民の方へ病院の現状を説明し、質問に答える会を行っています。経営状況から患者さんの状況、医師不足の背景など病院をよく知っていただくために細かいことまで話します。また、住民の有志の方々が発案して、『地域医療を支援する会』を立ち上げてくれました。病院と地域住民の距離が少しずつ近くなっているのを感じています」。

臨床研修指導にあたっては、「一から十まで全部教えるのではなく、研修医が自分でどう考えるかが大事」と主体性を大切にしているという。

「研修医には、常に自分なりの考えをもって自律してほしいと思っています。よく『私は研修医の誰それです』と言うのですが、国家試験を通して医師免許をもったのですから、すでに普通の医師と同等・対等だと思って、『研修医の』と言わない気概をもってほしいですね。もちろんその代わり責任は伴いますよ」。

また、現場主義による教育も大切に、「病院によっては研修医にあまり手技や診療をさせないところがありますが、私は逆で、どんどん研修医自ら経験してほしいと思っています。そうすることで、研修医の目の色が変わりますよ。責任が伴うからみんな必死で取り組むんです。ですから、希望があればかなり受け入れて柔軟に対応しています。例えば、内視鏡を勉強したいという2年目のある研修医は、消化器科以外を回るときでも、年間を通じて内視鏡の勉強を続けられるように配慮しています」と支援も惜しみなく研修に取り組んでいる。

■「研修医は島田の宝」



谷尾 仁志 総合診療科部長

1980年（昭和55年）から続く豊富な臨床研修指導の経験・実績により、当院には全国各地から研修医が集う。臨床研修プログラム責任者を務める谷尾仁志総合診療科部長に臨床研修の特徴を伺った。

「初期研修プログラムの特色として、特に救急研修においては、内科・外科・小児科など全領域を網羅でき勉強になります。制度上の3カ月間の救急研修だけではなく、年間を通して救急に対応する救急当番を作っていますので、月曜から金曜までを午前・午後に分けた10枠のうち週2〜3枠は救急担当になり、初期1年目、2年目、後期研修医、それから常勤医2人ほどの計4〜5人によるチームで救急診療にあたります。当番が終わるときには、チームのリーダー、スタッフが症例を振り返りますので、研修医にとっても非常に勉強になると思います。

当直は、大体週1回、月4回入りますが、これも初期1年目、

2年目、内科系、外科系それぞれの常勤医が入り、計4〜5人で当直にあたります。必要に応じて、各科のオンコールも控えています」。

そして、救急診療に欠かせない手技や資格の修得にも力を入れているという。

「救急でのエコー検査がとても役に立つことから、内科を回る6カ月間、腹部と心臓のエコーを毎週2時間ずつ学んでもらっています。6カ月も経てば、通常の検査を1人で撮れるレベルに達しますのでかなり役立っています」。

また、ICLS、BLS、ACLSは院内で講習会を年数回開催していますので、初期研修で必ず資格を取るようにしています。もちろん講習費用は全額病院が補助をしております好評です」。

その他にも、地域医療研修や外来研修など充実している。

「地域医療研修では、お茶がおいしい川根地区の診療所で研修に入ります。診療所での外来診療や往診に同行するなどして指導を受けています。日頃から、紹介患者さんの症例検討会やトピックスの講義などを聞き診療所の先生には病院に集まっていたり、逆に、診療所の先生方が毎年バーベキューに研修医を含めて招待してくださって、コミュニケーションを図ることができているので、紹介状の文字だけではなく顔を会わせた交流で結びつきが強くなっています」。

2年目には外来診療も担当してもらい、軽症の方からある程度の重症の方まで、限られた時間内で上手に診察を進めていき、診断をつけるトレーニングを積むようにしています」。

研修中の指導体制の充実にも余念がなく、「初期研修1年目、2年目は総合診療科の所属となり、個別面談も行うなど、年間を通してメンタルケアも含めた対応をしています」と万全のサポートを敷いている。

初期研修修了後の後期研修では、各自の希望を最大限考慮し、1人ずつ独立した研修スケジュールを組んでももらえるという。

「例えば、内科をもっと勉強したい方には、循環器内科、呼吸器内科、血液、腎臓など希望する科のローテーションとしたり、もちろんストレートで循環器内科だけという方も希望に沿うように受けてもらうことができます」。

「どのような医師に育ってほしいですか」との問いに谷尾部長は、「ここで学ぶ研修医には、心が温かな、人から信頼される医師になってほしいと思っています」と答えてくれた。

「研修医は島田の宝です。若手を教えるためには、教える側ももっと勉強しないとイケません。研修医がいることで、われわれもまたレベルアップしますので、今後も欠かさずに研修医を指導していきたいと思っています。最終的には、『この島田で研修してよかった、誇りに思う』と言ってもらえる病院であればと考えています」。

研修医に聞く

花澤 豪樹 医師、小黒 麻衣 医師

「ここで研修ができれば幸せだなと思った」と明かしてくれたのは、2年目研修医の花澤豪樹医師。大学5年生のときに当院で実習を3週間行ったという花澤医師は、当時の印象を次のように語ってくれた。

花澤医師「若手の先生が救急や病棟の診療にあたっているのを見て、すごい活き活きと主体的に仕事をされているなと感じましたね。先生方にご飯に連れて行ってもらったり3週間熱烈な歓迎を受けて、ここで働いてみたいなと感じたその気持ちを大事にしようと思いました」。

1年目の小黒麻衣医師もやはり実際に当院の雰囲気のよさに触れたことが決め手になったといい、「見学に来て研修医室をパッと見たとき、研修医の方が活き活きとされている雰囲気を私も感じましたね。いい意味で緊張感もあって、かといってぎすぎすもしてなさそうで、自分がここにいたら居心地がよさそうだなと思い選びました」と話してくれた。

当院の売りの1つでもある救急研修についての感想を小黒医師は、「各科を回る間にも救急でほかの疾患を診ることができたり、どの科にいても急変はあり得ますから、そのときの対応について心構えができるのはすごくいい点」と話し、花澤医師も「二次救急までに必要なファーストタッチの部分などの基本は相当学べるので実践に即した救急研修ができます」と答えてくれた。そして何より、チームで対応するため安心して研修に臨めるという。

花澤医師「指導医や先輩が常にいるので、上の方がいるとやはり安心感は全然違いますね」。



花澤 豪樹 医師
(2年目)

小黒 麻衣 医師
(1年目)

カンファレンスやレクチャーなどの学びの機会も豊富に用意されている。

花澤医師「総合診療科の枠組みの中で、カンファレンスやレクチャーを水曜日以外ほぼ毎日毎朝、土曜日の午前中も行っていて充実しています」。

小黒医師「カンファレンスの内容も勉強になりますし、研修医みんなで集まって意見交換の機会にもなります。研修医同士でお互いを高めあうことにもつながっています」。

研修環境も整備されており、小黒医師は「当直室は素晴らしいです。研修医室も充実してきれいですね」と話し、特に当直室や研修医室は居心地のよさから「レジデント」の文字通り住み込んでしまうこともあるという。

花澤医師「ずっと居座って主^{おし}みたいになっている人もいます(笑)。科によってはとても忙しいですから、住んでしまいがちですが、でもその方が研修に集中できていいんですよ」。

最後にこれからの目標を訪ねたところ、花澤医師はこう明かしてくれた。

「理想を言えば、例えば、当院にいる確実に的確に診断治療ができる先生や、あるいは患者さんから絶対的な信頼を得ている先生など、そのような指導医の先生方がもつ個々の長所をすべて盗みみたいと思っています。当院にはいいものをもっている優れた指導医の先生方がたくさんいますから、すごくいい2年間を送れる環境にあると自分はと思っています」。



研修医のみなさん 谷尾部長を囲んで